



Milk Hall Times 2010



Café

ミルクホール復活へ

今日は、10月24日 日曜日。急に冷え込んできて暖房が欲しいような陽気です。加えて午後から冷たい雨も降ってきました。ですが、今日もミルクホールの現場は朝から沢山の工事さんが入って、懸命に仕事にとりかかっています。ミルクホールが閉店して約4ヶ月。一度は全てが取り払われたこの場所に、ミルクホールが戻ってきつつあります。地面から柱が建ち、屋根が覆われ、壁が出来て、その骨組みはミルクホールの骨組みそのものですが、まだそれは、おじいさんに命を吹き込まれる前のピノキオだったのですが、今、この間にもその命が吹き込まれようとしています。皆で働いたパーカウンターが戻ってきました。仕切り壁の菱形の窓も取り付けられています。あの懐かしいホールの柱も、まるでミルクホールの記念碑のように、その場所にずっとあったかのように建ちました。塗装が擦り切れた腰壁の手すり、巾木、もうすぐ出窓も戻ってきます。木偶人形のように見えていたものが、あるべき場所に戻り、全てが勢ぞろいした時に、ピノキオが動き始めるはずなのです。それまでには、まだまだ大工さんたちの息の抜けない仕事が沢山残っています。そして、その間を縫って、電気屋さんは大切な神経系統を、注意深く、慎重に張り巡らせています。水道屋さんとガス屋さんの仕事は、動脈や静脈となる血管を床下や天井裏に組み込むことです。8月の棟上げの日に、初めて顔を合わせた職人さんたちが、今では長年一緒に仕事をしてきた昔なじみのように、毎日協力しあって仕事をしています。やっかいで困難なミルクホール再生の仕事を、解体前の写真と図面とを見比べては、ああでもないこうでもない皆で頭を寄せ合って、相談し、知恵を出し合いながら、毎日取り組んで下さっています。それは本当に、幸せなことです。この思いに守られた現場を、私達は一生忘れないでしょう。もうしばらくすると、壁に漆喰が塗られていきます。そして真新しくなった壁と、戻ってきたカウンターや、柱を繋いで行くのは、私達ミルクホールスタッフの仕事です。

ミルクホール再生まで、あと1ヶ月余り……

COLUMN

鎌倉の猫事情
第百話

ミルクホールの熱い現場の成り行きなどなんのその……
といったいつも変わらぬおっとり刀のスイーピーちゃん。あいも変わらず、大きなお尻を丸くして一日中眠っています。「猫っていうのは、こんなにそれぞれ違うもんですかぁ」と、あきれているのは、ミルクホールスタッフのI君。彼は子供の頃は団地暮らしで、現在はマンションに住んでいるので、猫を飼ったことがないそうです。ところが、グーニーに出会って猫の面白さに目覚めたのです。彼ばかりでなく他にも、ミルクホールのアルバイトやお客さんの中にも、猫はちょっと苦手……、猫ってなんか馴染みにくいと思っていた人が、「グーニーに会って、猫に対する考えが変わりました」とか、「私、グーニー見て猫派に転向しました」なんて言う人が結構いたのです。先日も、ミルクホールの屋台に、グーニーが死んだ事を知らなかったというお客さんがみえて、少し涙ぐんでおられたという話を聞きました。確かに、グーニーは可愛かったし、最良目を差し引いてもお利口な方だったんじゃないかなとは思いますが、グーニーが好きだったという人は、実は猫が苦手な人が多いんです。つまり、あんまり猫らしくないんです。私もその辺をご主人に連れられて歩いている犬を見て、「あ、可愛い、グーニーみたい……」なんて懐かしがっているのには、自分でびっくりしているほどです。本当に猫好きな人は、何にでも興味を示して首をつっこんでくるグーニーよりいつでもマイペースで、何が起っても知らないそぶりで昼寝を決めこむスイーピーの方が好きみたいです。でも、猫の本音は色んなことに興味があるんですけどね。—— to be continued



ミルクホールタイムス総集編

「鎌倉ミルクホールタイムス」

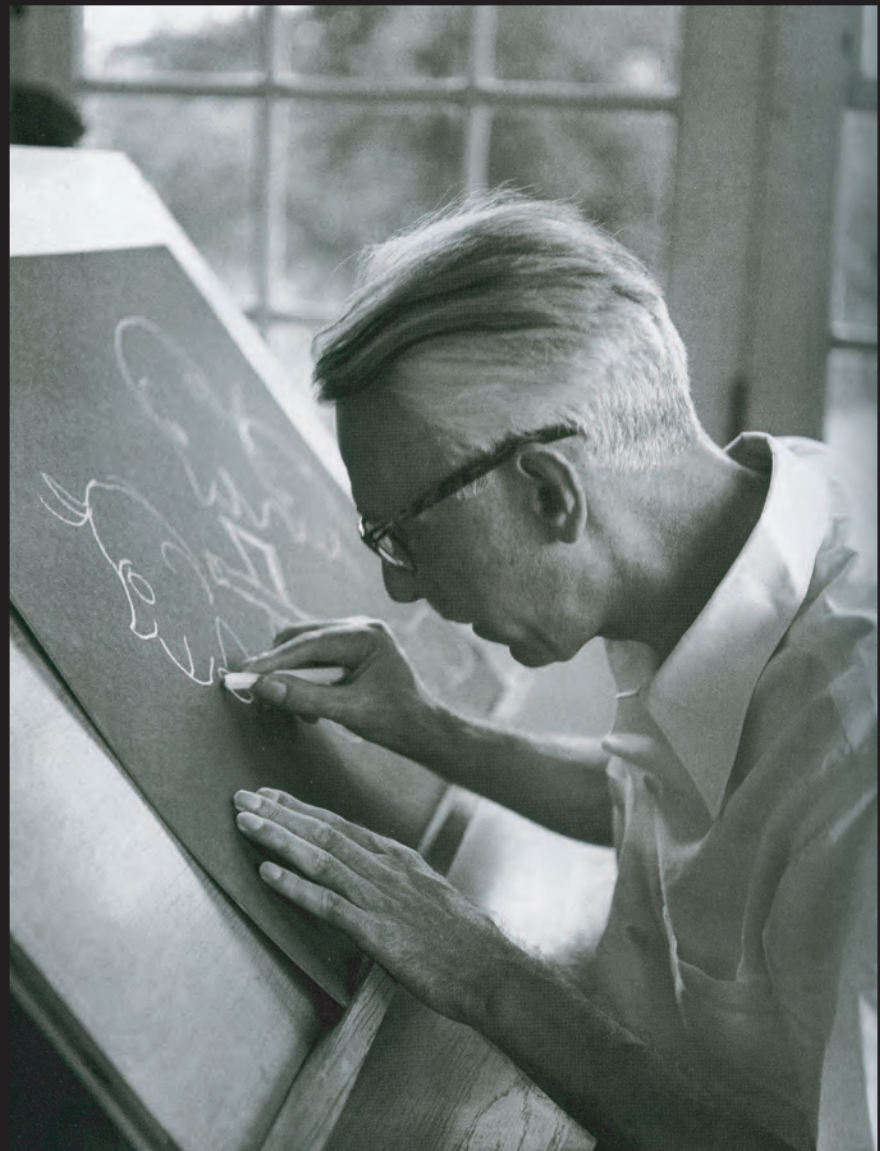
No.001～No.100

ミルクホールタイムスの創刊号より100号までを編集した総集編です。 ¥1500

ミルクホールタイムス創刊号

ミルクホールタイムス
定期購読募集

ミルクホールタイムスを、毎月発行日の25日に郵送致します。 年間購読料 ¥1500



information

再生ミルクホールでは、ミルクホールのアンティークショップだったスペースをこの機会に思い切って、2階建てに改造し、新しいスペースを作りました。1階においては、通常は禁煙席としてオープン致します。そして、15人程度の予約室として、パーティールームや、ギャラリーなどにご利用頂けるようになります。2階の小部屋では、アンティークショップを再開する予定です。来年には、広くなった庭での蚤の市の計画中です。ミルクホールの新しいスペースを、お楽しみに……



JAZZ 屋台 (仮店舗) カフェ・ミルクホール 2010年秋、2ヶ月限定の ミルクホールのJAZZ屋台 11月7日閉店！

工事現場に建てたミルクホールのジャズ屋台の営業期間がもう間もなく終わります。2010年の焼けつくような暑い晩夏から始まったやぶれかぶれみたいなジャズ屋台の建設、そして、わずか2ヶ月の営業期間。この小さな空間で、さまざまな人と出会い、顔がくつきような部屋ならではの会話もありました。短い間の思い出は、楽しく、すばく、ほろ苦く・・・ 今年の灼熱の夏の記憶とともに、いつまでも忘れる事はないでしょう。残りわずか2週間ほです。まだと、いう方はぜひご来店ください。スタッフがお待ちしています。

いよいよミルクホール開店準備始まる 再生ミルクホールへ 2010年 12月初旬！

今年7月4日PM6:00にミルクホールを開店し、37年間に営業を閉じました。その日以来、ひたすらミルクホール再生へ向けて斉藤建設の工事スタッフが建築の基礎となる工事に取り組んで下さっていましたが、いよいよその努力が形になり、ミルクホールの全貌が現れて来ています。私達ミルクホール再生チームの出番は、もうまもなくです。11月に入ったら、工事の合間を縫って塗装工事や修復作業を自分達の手で始めて行きます。一つ一つ丁寧に、確かな記憶を辿りながら。ミルクホール再生まで、もうすぐです・・・

ミルクホールマスター& スタッフ一同

KAMAKURA

場所の記憶 No.50

HISTORY

さよなら ミルクホール
2010年 7月4日 6:00 PM

ミルクホールのルーツ No.35 スタッフたち

真夜中になってもまだ、ミルクホールにして最初の同窓会で、最後のパーティは続いていました。懐かしい顔、顔・・・と言っても37年間です。すごく長かったんで、本当に申し訳ないけれど忘れちゃっている人もいます。そんな一人、「私、私ですよ！ 里ちゃんですよ。フミさんがそう呼んだんですよ、忘れちゃったんですか！？」と、迫られ、もごもごしているうちに思い出しました。「うん、そうだったね。思い出した！」「もう！」と、怒りながらも、機嫌を直してくれました。その人その人に、記憶のキーワードがあって、そこが合えばちゃんと思ひ出すのです。集まったアルパイト同士も同じようなことをあちこちでやってました。「そうそう、あの時の！？」なんて・・・皆、それぞれの時間が流れたのです。37年間の間に。もちろん集まった半数以上は、37年前には生まれていませんでしたけれど。そんな思いの時の最後のミルクホールで過ごしていました。すると、「みんな！ 集まれえ！」の号令がかかりました。マスターです。かなりご機嫌になってます。ホールのテーブルの上に立って皆を集めようというのです。いいんですよ、いいんですが、もうかれこれ6回目？皆ざわざわしながらも、ホールに集まって来ました。集まった皆を満腹に眺めて、「エヘン！ 皆、聞いてくれ！」と始まります。聞いてくれて、もう何度も・・・ついに反乱が起きました。6度目のマスターの演説に、皆、一斉に、「さっき聞いた～！」「そうだ！ さっき聞いた～！」「え？じゃ、この話は？」「それも、聞いた～！」全員のシュプレヒコール。もう真夜中だし、この「さっき、聞いた」コールですごく盛り上がりました。皆が一つになったっていうのか・・・これが妙に・・・楽しかった。

次号へ続く



JAZZ exhibition

マイルス・デューイ・デイヴィス三世
(Miles Dewey Davis III, 1926年5月26日 - 1991年9月28日)
トランペッター

アメリカのイリノイ州アルトンにて開業医の父と音楽教師の母といった裕福な家に生まれ、ノース・セントルイスで育った。セントルイス派のショーティー・ペイカー、クラーク・テラーらの影響を受け、ノンビブラートのスタイルを身につけた。40年代の中期にパーカー、ガレスピーらに会ってビ・バップの洗礼を受け、やがてNYに出てジュリアード音楽院で学び、45年以降パーカーと録音や共演を重ねて成長した。19歳から亡くなる65歳まで足跡は、帝王マイルス・デービスの名に相応しいものであった。

◎Birth of The Cool Capitol 1950 「クール・ジャズ」の誕生
◎Birdland 1951 Blue Note 1951
◎Bags Groove Prestige 1954 Xmasイブのモンク との「喧嘩セッション」収録
◎Ascenseur Pour L'Echafaud Fontana 1957
映画「死刑台のエレベーター」のサウンドトラック
◎Round About Midnight Sony 1955 56 黄金クインテットによる演奏
◎Kind of Blue Sony 1959 モダンジャズ史上最高傑作
◎Bitches Brew Sony 1969 エレクトリック・マイルスの大傑作
◎Tribute to Jack Johnson Sony 1970 映画「ジャック・ジョンソン」サントラ
◎At Fillmore : Live At The Fillmore East Sony 1970 キース・ジャレット参加
◎Man With the Horn Sony 1980 復帰作
◎Doo-Bop Warner 1991 ラストレコーディング作品



MILES & MONK



AT NEWPORT

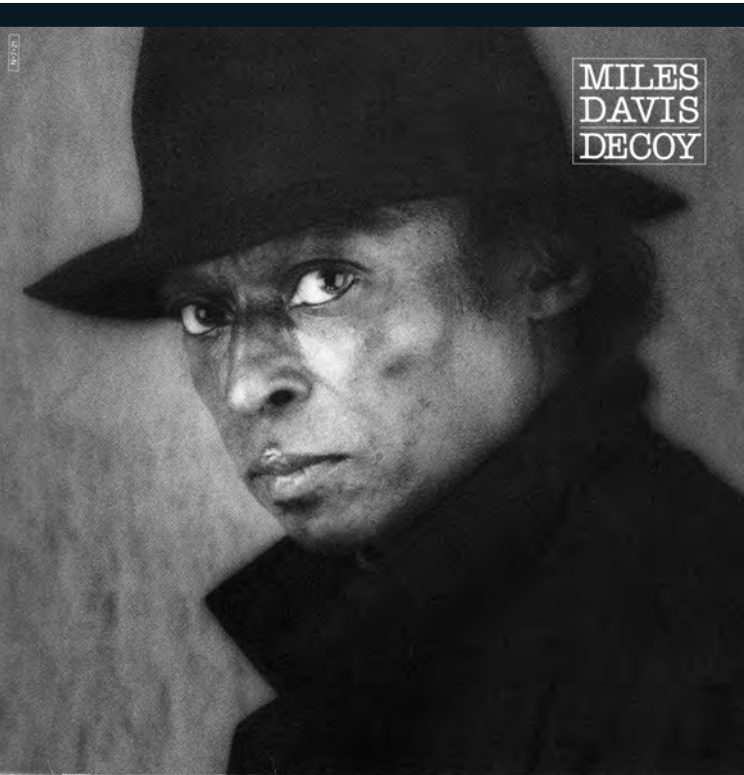
The Miles Davis Sextet
Featuring John Coltrane and
"Cannonball" Adderley
The Thelonious Monk Quartet
and
Pee Wee Russell

BEAN BAGS ATLANTIC 5044

MILT JACKSON COLEMAN HAWKINS



MILT JACKSON GOODBYE WITH ROBERT LAWS



MILES
DAVIS
DECOY

MILES DAVIS

マイルスは、アメリカの人種差別を嫌悪していた。「カストロはアメリカを批判するのに3日かかると言ったが、俺なら2週間かかる」とまで言っていたが、音楽性の追求には人種は関係ないというスタンスを貫き通した。マイルスは親友であり、マイルスの知恵袋と言われたギル・エヴァンスには生涯に渡って強い影響を受けていた他、リー・コニッツやジェリー・マリガンといった白人ミュージシャンを起用した。時に主なマイルス音楽のリスナーだったアフリカ系アメリカ人の層からは多くの批判を浴びせられた。第一期クインテット時代に、一時的にビル・エヴァンスをバンド・メンバーに迎え入れ、ビルは音楽的には大きな貢献をしたものの、一年程度の在籍のち客達による白人バッシングに耐えきれずにバンドを去ることになった。1960年代末のエレクトリック導入期にはジョー・ザヴィヌルやジョン・マクラフリンの存在抜きには考えられないほど彼らの才能を評価していたし、その後もチック・コリアやキース・ジャレット、デイヴ・リープマンなど多くの白人メンバーが在席した。唯一のアジア系人種として、ピアニストのケイ赤城が1989年から2年間レギュラーメンバーとして活躍した。70年代後半の休養期にも日本人ピアニスト菊地雅章が未発表セッションに参加していた。速いモノを好む。常にフェラーリなどのスポーツカーを乗り回していた。車で移動すれば1時間のところを、飛行機に乗ることに固執し、3時間かかってしまった事ある。1980年に復帰以降は、絵を描くことに没頭し、『スター・ピープル』のジャケットは自分でデザインした。1991年9月29日、病のため突如逝ってしまう。享年65歳。病室には、次なる構想が記された譜面が残されていた

SOMETHIN'
ELSE
CANNONBALL
ADDERLEY
MILES DAVIS
HANK JONES
SAM JONES
ART BLAKEY
BLUE NOTE 1595